

日中両国語のアスペクトにおける継続表現の対応について

—「ている」、「着(zhe)」、「在(zai)」を中心に—

孫 国 震

I. 序 論

日本語と中国語は、それぞれアスペクトをもっているが、言語が違うから、そのおのおののアスペクトの言語形式も異なる。日本語と中国語のアスペクトの言語形式も異なる。日本語と中国語のアスペクトは、その言語範囲以外の人々にとっては、非常に理解しがたくて難しい問題となる。本論は、日中両国語のアスペクト継続表現をテーマにし、その基本的なもの——「ている」と「着」、「在」を中心に考察する。

なお、本論は、基本的には、動詞の共通な語彙的意味と関連して、「着」「在」と「ている」について考察するが、共通な語彙的意味による日本語動詞の分類は、工藤真由美(1982)に従い、そして、中国語動詞の分類にもそれを取入れてみる。

II. 各 論

1. まず、日本語の継続表現「ている」についての在来の研究について考察した。そして、アスペクトの観点からすれば、動詞は、その共通な語彙的意味により、「運動動詞」と「状態動詞」に分けられる。「状態動詞」は、運動の性質をもたない、単なる一種の状態を表わし、運動の性質をもつ「運動動詞」と対立する。状態動詞を細かく分析すると、

- 状態動詞 {
- ① 一般状態動詞（「る」形しかないもの）——ある、いる、一すぎる、etc.
 - ② 特殊状態動詞（「ている」形しかないもの）——そびえている、すぐれている、似ている、etc.

とある。

「運動動詞」とは、運動の性質をもち、物事の運動を表すものである。その共通な語彙的意味により、運動の動きを示す「動き動詞」と運動の変化を表す「変化動詞」に再分類できる。「動き動詞」に「ている」がつけば、基本的に「動きの継続」を表し、

「変化動詞」に「ている」がつけば、基本的には、「変化動詞」に「ている」がつけば、基本的には、「変化の結果の継続」を表す。

「動き動詞」は、その性格からだいたい次の三種類に分類できる。

「動き動詞 A」(客体をもたない)——歩く、走る、はう、叫ぶ、踊る、etc.

「動き動詞 B」(客体をもっていてそれに変化をもたらさない)——たたく、読む、押す、なぐる、話す、etc.

「動き動詞 C」(客体をもっていてそれに変化をもたらせる)——削る、作る、こわす、わる、折る、曲げる、etc.

「動き動詞 C」は、主体の観点からは、主体の「動きの継続」を表す。また、客体に変化をもたらせるという側面をもっているので客体の観点からは、「変化の結果の継続」を表せる。

「変化動詞」も、その性格から次のように分類できる。

a. 主体の状態の変化を示す動詞——死ぬ、終る、狂う、酔う、汚れる、etc.

b. 主体の移動位置を示す動詞——行く、来る、帰る、もどる、etc.

c. 再帰動詞——着る、かぶる、はく、etc.

d. 人間の姿勢の変化を示す「立つ」類動詞——すわる、立つ、しゃがむ、etc.

e. 客体移動変化後の保持を示す「持つ」類動詞——もつ、抱く、背負う、握る、くわえる、etc.

aとbは、変化の結果の残存を表し、c、d、eは、主に変化後その動詞が表す動きも保持されてゆくことを表す。

ある一定の構文的条件のもとでは、「動き動詞+ている」が「変化の結果の継続」も表し、「変化動詞+ている」が「動きの継続」も表せる、という相互移行現象が起る。

「動きの継続」→「変化の結果の継続」

- (1) 田中君は、日本酒をだいぶ飲んでいる。(動作量を規定する副詞と共起する)
- (2) 彼は、今東京にいる心はもうパリにとんでいる。(移動動詞が到着格「に」や「まで」と共起する)
- (3) 花火が空を赤く染めている。(意志的動作の主体の欠如)
- (4) 彼の名刺には、名前と住所だけ刷られている。(受身文による主体の背景化)
- (5) 今日は、彼女は、口紅を塗っている。(再帰的意味をもつ文)

「変化の結果の継続」→「動きの継続」

- (6) 大型トレーンやトラックは、現場にどんどん行っている。(変化をもたらす動

きの様態を規定する修飾語と共起する)

(7) 彼女は、隣の部屋で着物を着ている。(場所格「で」との共起)

(8) 今ごろ、子供は、いつもの道をかえっていることだろう。(移動動詞が移動空間格「を」、方向格「へ」、起点格「から」と共起する場合)

「ている」の派生的意味としては、「反復」「経験、記録」がある。前者は、同じ運動がくりかえして行われることを意味し、「近ごろ、毎日、よく、たまに、etc」という副詞的成分とよく共起する。後者は、過去に実現した運動が現在の状態に何らかのかかわりをもっているか或は記録として現在残されているかを表す。「経験」は、「～によれば」、「～の話では」とよく共起し、「記録」は、「二年半前」などの過去時間名詞とよく共起する。その派生的意味は、「動き動詞」からも「変化動詞」からも作れる。

2. まず、中国語の「着」についての従来の研究を概観して、「着」が動詞に後接すれば、その意味として二分類できるとした。それは中国語動詞の共通な語彙的意味によるのである。

動詞は、その共通な語彙的意味により、まず「運動動詞」と「状態動詞」に分けられる。「状態動詞」は、運動の性質をもたない、単なる一種の状態を表す。

状態動詞 { ①一般状態動詞 (V ϕ 裸形式しかないもの) —— 有 (ある)、恨 (恨む)、
討厭 (きらいだ) etc.
②特殊状態動詞 (V着形式しかないもの) —— 耸立着 (そびえたっている)、
标志着 (しめしている)、意味着 (意味している) etc.

「運動動詞」もその共通な語彙的意味により、「動き動詞」は、日本語のそれと同じように次のように三分類できる。

「動き動詞 A」(客体をもたない動詞) —— 走 (あるく)、哭 (泣く) etc.

「動き動詞 B」(客体をもっていて客体に変化をもたらさない動詞) —— 看 (見る)、喝 (のむ)、敲 (たたく) etc.

「動き動詞 C」(客体をもっていて客体に変化をもたらせる動詞) —— 剥 (むく)、做 (作る)、包 (つつむ)、挂 (かける) etc.

「着」は、上記の三種類の「動き動詞」に後接して、基本的には、主体の動きの継続を表すが、様態を表す連用修飾語か終助詞「呢ne」がなければ文としては不完全となる。但し、「扔 (すてる)」、「打 (なぐる)」のように一回的動きの性質が強い「動き動詞」には「着」が後接しにくい。

中国の「変化動詞」も、基本的には、日本のそれと同じ性格をもっている。

- a. 主体の状態の変化を表す動詞——死（死ぬ）、断（きれる）、破（やぶれる） etc.
- b. 主体の位置移動を示す動詞——出发（出発する）、去（行く）、来（来る） etc.
- c. 再帰動詞——穿（着る）、戴（かぶる）、 etc.
- d. 人間の姿勢変化を示す「站」類動詞——站（立つ）、坐（坐る） etc.
- e. 「拿」類動詞——扛（担ぐ）、抱（だく）、挑（かつぐ） etc.
- f. 「开」類動詞——开（あく）、关（しまる）、鎖（カギがかかる）

「着」は、aとbに後接できないが、c、d、e、fに後接でき、「変化の結果の継続」を表す。というのは、c、d、e、fの「変化動詞」には、動作結果の持続性が含意されているからである。また、「站」類動詞と「立つ」類動詞との異同について考察したが、前者は、後者とちがってそれ自身だけでは変化が表れないので、それ以外の言語成分に頼らなければならない。

ある一定の構文的条件のもとでは、「動き動詞＋ている」が「変化の結果の継続」を表すこともある。変化した結果、客体がどこかに付着することが表わせる「動き動詞C」の一部は、「着」が後接して、「LV着O」という存在文と再帰的な意味や主語欠如という構文的条件のもとでは、主体が背景化され、主体が働きかける客体がどうなっているかということが浮きぼりにされて、「変化の結果の継続」へ移行する。

「変化動詞」においては、相互移行現象はかなりまれなものとなる。「再帰動詞＋ている」が「一边…一边（…ながら～）」という構文的な条件のもとでは、「動きの継続」の意味へ移行できる。それ以外に、一般化できない移行現象がいくつかある。

また、「形容詞＋着」についても、従来の研究をふまえながら考察した。それは、基本的に変化の結果の状態の継続を表す。

さらに、「着」の用法についても、主に「V₁着V₂」、「A着V」、「V₁着V₁+V₂」を考察した。それらの従属節の「着」に前置される動詞は、「変化動詞」もあれば、「動き動詞」もある。「V₁（動き動詞）着」が「V₁（変化動詞）着」、「A着」と同じように従属的成分としてVを修飾できるので、「V₁着（動きの継続）」は、一種の状態化された「動きの継続」に傾いている。

「着」は、状態化された「動きの継続」を表す。「変化の結果の継続」を表す時、「着」と共起できる動詞は、動作結果の持続性が含意される「変化動詞」と、変化の結果として客体がどこかに附着される「動き動詞C」の両者だけである。

3. 「在」に関する従来の研究をもとに、副詞「在」を分析して、「動態副詞（アスペ

クト副詞)」と捉えている。

「在」は、「状態動詞」に前置できない。「運動動詞」における「動き動詞」に前置でき、「動きの継続」を表す。「変化動詞」の場合は、再帰動詞、「拿」類動詞の一部、「开」類動詞にしか前置できなくて、やはり「動きの継続」を表す。よって、「在」は、「動きの継続」の一義しかもたない。それで、ある一定の構文的条件のもとでは、「動き動詞」が「変化の結果の継続」を、「変化動詞」が「動きの継続」を表すような相互移行現象は起こるはずはない。

また、「在」の用法についても考察した。「他在図書館里看书（彼は図書館で本を読んでいる）」のように、副詞「在」と介詞「在」が重なる特殊な用法がある。

「在」は主体の主張、判断、判定などを表す副詞的成分や文型とよく共起する。それで、「着」とちがって主体の陳述的態度が含まれている「動きの継続」にむいている。

4. 「在」は、Vに前置するアスペクト副詞であり、「着」は、Vに後接するアスペクト助詞である。「在」と「着」は、どちらも「変化動詞」の一部にしかつかない。「着」は、その「変化動詞」に後接すれば、「変化の結果の継続」を表し、「在」は、その「変化動詞」に前置すれば、「動きの継続」を表す（「站」類動詞が含まれない）。「動き動詞」の場合は、「着」が一回的性質が強い動詞につきにくいのを除けば、「着」と「在」は、みな「動きの継続」を表すことができる。「着」と「在」が同時に用いられる例も次のようになりある。

- (a) a. 魚津在等待着对方开口。（魚津は相手が話し出すのを待っている）
- b. 魚津等待着对方开口。（同上）
- c. 魚津在等待对方开口。（同上）

但し、それぞれ特有な文脈が生じる場合。「着」と「在」がはっきり使い分けられている。

Ⅲ. おわり

この章では、「ている」と「着」、「在」との異同いかんについて考察した。




(表1) 状態動詞


	一般状態動詞	特殊状態動詞
日本語	る	ている
中国語	V ϕ	着

(表2) 運動動詞

	「動きの継続」	「変化の結果の継続」
日本語	ている	ている
中国語	着	着了
	在	なし

相互移行現象

	「変化の結果の継続」への移行	「動きの継続」への移行
日本語	ている	ている
中国語	着 	着 
	なし	在 

()とは、非対応の部分を目指す

「反復」においては、「ている」と「在」が一応対応しているが、「在」は「変化動詞」の一部にしか前置きできないので、制約がある。「経験」においては、日本語の「ている」に対しては、中国語は「過」が用いられる。「記録」では、「ている」と「了」が対応している。

「着」は、形容詞に後接でき、また「V着」、「A着」という形で従属的成分として用いられる。「在」は、場所を示す介詞「在」と兼用できる。それらの用法は、日本語の「ている」にはない。

上記のような非対応をもたらした原因としては、「在」「着」と「ている」それぞれ自身の特徴と中日両国語の文法体系の違いがあげられる。

「在」はもともと動詞としては、ある所に位置するという意味特徴をもっていた。「着」は、元來動詞としては、「附着」という意味合いをもっていた。「ている」の「いる」は、存在の状態を表す実在動詞である。現在それぞれ副詞化されるにしても助詞

化にされるにしても、それぞれの意味特徴がある程度残っている。それで「動詞」につくとき、それなりの制約が現れてくる。

中国語の動詞には、活用がないため、「V 着」、「A 着」は、そのまま従属成分としても使える。日本語の動詞は、活用が必要なために、制約がでてくる。また、アスペクト副詞「在」は、V に前接して場所介詞「在」に隣接するのでそれと重なるのである。

以上、動詞の共通的語彙的意味との関連から、「ている」と「着」「在」の意味について分析し、また、その異同の対応いかんを試みた。しかし、本論は、ただ日中両国語のアスペクトにおける継続表現の一端にふれただけである。それ以外は、今後の課題にしたい。

／参考文献／

工藤真由美 (1982) 「シテイル形の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』13-4